



## 「中島 敦の『斗南先生』・実話」を開催するにあたって

当館は、平成5年10月に開館して以来、「歴史資料として重要な公文書その他の記録」を保存し、これらを計画的に整理・公開していくことを主な業務としております。この公開は、利用者の皆様が実際に生の資料を手にとって閲覧していただくことを原則としておりますが、その一方で、公文書館をたくさんの市民の皆様にご利用いただくため、年2回の企画展を催し、公文書館資料を身近に感じてもらうよう努めています。

10回目を迎える今回は、「中島 敦の『斗南先生』・実話」と題し、中島 敦が小説『斗南先生』で描いた、実在の伯父中島端蔵という人物にスポットをあててみました。

敦は、その小説で斗南先生を、「昔風の漢学者気質と、狂熱的な国士気質との混淆した精神」をもつ人として、「一生、何らのまとまった仕事もせず、志を得ないで、世を罵り人を罵りながら死んで行った」人として、あるいは「我儘な、だが没利害的な純粹を保って居り、又、その気魄の烈しさが遥かに常人を超えていた」人として描いています。ご関心のある方は、ぜひとも中島 敦の小説『斗南先生』をお読みになることをお奨めいたします。

また、中島端蔵は、久喜においてもその活動の痕跡をいくつか残しています。言揚学舎の設立、无邪志会の発足、そして最も有名なのは明倫館の設立並びに初代館長就任ということです。これらについても併せて紹介いたしました。

中島端蔵の自筆資料は、その多くを本人が火に投じてしまったといわれているため、関係資料は非常に少なく、このことが今まで中島端蔵の実態に迫れなかった原因の一つにもなっています。今回の展示では、端蔵の関係資料の主なものを確認できる範囲で紹介することにいたしました。この展示を観覧された皆様のなかから、さらなる調査・研究が進められ、過去の歴史が少しでも明らかとなっていくことをご期待申し上げます。

最後になりますが、今回の展示を行うにあたりまして、ご協力をいただきました関係者の皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成11年2月

久喜市公文書館長

### 主な参考文献

- 佐々木充「『斗南先生』—原型の発見—」（『中島 敦の文学』所収、1973）
- 村山吉廣「中島 敦とその家学—鵬齋門流の中島撫山—」（『中国古典研究』22、1977）
- 中村光夫・氷上英廣・郡司勝義編『中島 敦研究』（筑摩書房、1978）
- 久喜市・鷺宮町両教育委員会『撫山中島家蔵書目録』（1978）
- 木村一信「中島 敦「斗南先生」の成立」（『近代文学考』6、1978）（後に『中島 敦論』所収、1986）
- 村山吉廣「中島 敦とその家学（続）—祖父撫山及び三人の伯父—」（『中国古典研究』27、1982）
- 村山吉廣「家系・教養—「家学を中心に」」（勝又 浩・木村一信編『中島 敦』所収、1992）
- ちくま文庫『中島 敦全集1』（筑摩書房、1993）
- 斎藤 勝『中島 敦書誌』（和泉書院、1997）

# I 資料でみる小説『斗南先生』

## 1 中島 敦著『斗南先生』

右の一文は、昭和七年の頃、別に創作のつもりではなく、一つの私記として書かれたものである。  
(『斗南先生』より)

中島 敦の小説『斗南先生』には、敦の分身である「三蔵」と「三蔵の父」(＝中島田人)、そして三蔵たちから「やかまの伯父」として煙たがられている「斗南先生」(＝中島端蔵)、斗南先生の弟で斗南先生と好対照の人物として描かれている「お髯の伯父」(＝中島竦之助)、さらに「渋谷の伯父」(＝関 若之助)、「洗足の伯父」(＝山本開蔵)等、実在の関係者が多数登場し、中島敦とその一族を考える上で非常に興味深い作品となっています。

敦自身も、この作品の一部は「創作」のつもりではなく、「私記」として書かれたものだということを、小説のなかで述べています。

### 関係者略系図



資料2 中島慶太郎の葬儀の際に一族で撮影した写真。中島端蔵(右から3人目)とその弟達が後列に並んで立っています。

## 2 斗南先生

伯父の遺稿集の巻末につけた、お髯の伯父の跋によれば、死んだ伯父は「狷介ニシテ善ク罵リ、人ヲ仮ス能ハズ。人マタ因ツテ之ヲ仮スコトナシ。大抵視テ以テ狂トナス。遂ニ自ラ号シテ斗南狂夫トイフ。」とある。従って、其の遺稿集は、「斗南存稿」と題されている。

(『斗南先生』より)



資料3 斗南先生 (1859 - 1930)  
本名は中島端蔵。通称は端 (まさし)。  
斗南は号。ほかに勿堂や復堂等の号もある。



資料4 『斗南存稿』

## 3 斗南先生の幼少時代

伯父は幼児から非常な秀才であったという。六歳にして書を読み、十三歳にして漢詩漢文を能くしたというから儒学的な俊才であったには違いない。

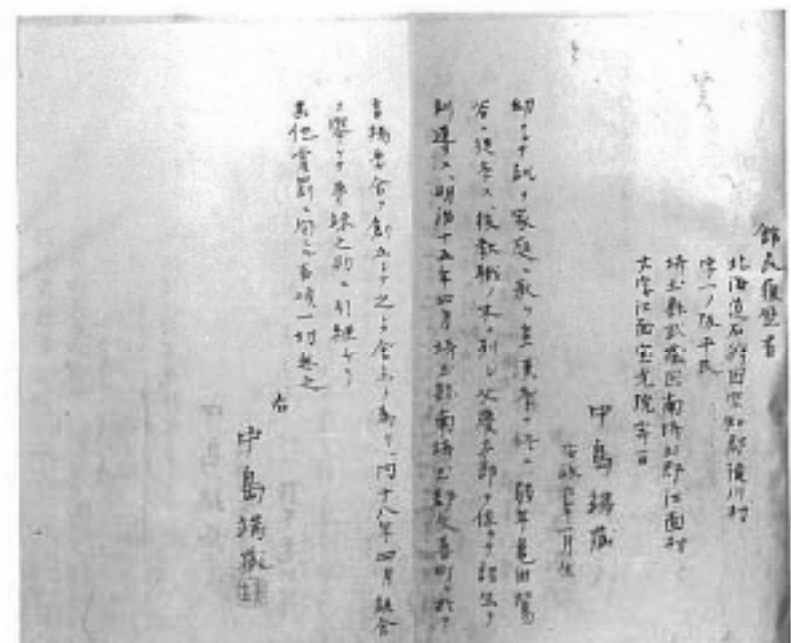
(『斗南先生』より)

資料5 中島端「日本文章の墮落に候」より

小生は元來儒家の不肖子にて候。今日より見候へば、随分無理なる教授法に候へ共、数へ年の六歳より白文の論語素読を課せられ候。萬事其調子に候ひし故、作文杯も十三四の頃より専ら漢文に力を用ゐる様に馴され來り候。

資料6 勿堂「我も筆も一体」より

小生も十三四五の折には怪しげながら兎にも角にも、漢文詩めきたるものを並べ覚え候。其より十七八九と成り候ては、少々は目も肥えてまるり候



資料7 明倫館設立にあたって埼玉県に提出した館長履歴書

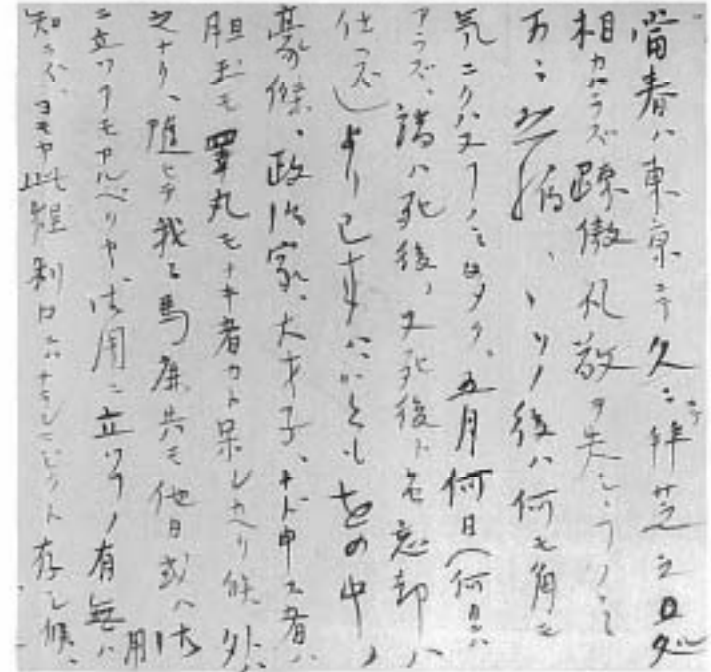
## 4 斗南先生の言動

伯父は～（中略）～、上に 聖天子おわしましなが<sup>ら</sup>有君而無臣を慨<sup>げ</sup>き、政治に外交に教育に、それぞれ得意の辛辣な皮肉を飛ばして、東亜百年のために国民全般の奮起を促しているのである。

（『斗南先生』より）



資料8 明倫館設立にあたって、「埼玉地方人の腰拔」共を、教育によって改革しようと意気込んでいる部分



資料9 日露戦後の三国干渉を受入れ、遼東半島を返還する詔勅が発布されたことに対して、憤慨している部分

## 5 斗南先生の著作

伯父の生活の経済的方面は久しく彼の謎であった。伯父はかつて、「支那分割の運命」なる本を出したことがあった。が、そんな売れない本から印税がはいる筈はなかった。

（『斗南先生』より）



資料10 『支那分割の運命』



資料11 『近世外交史』

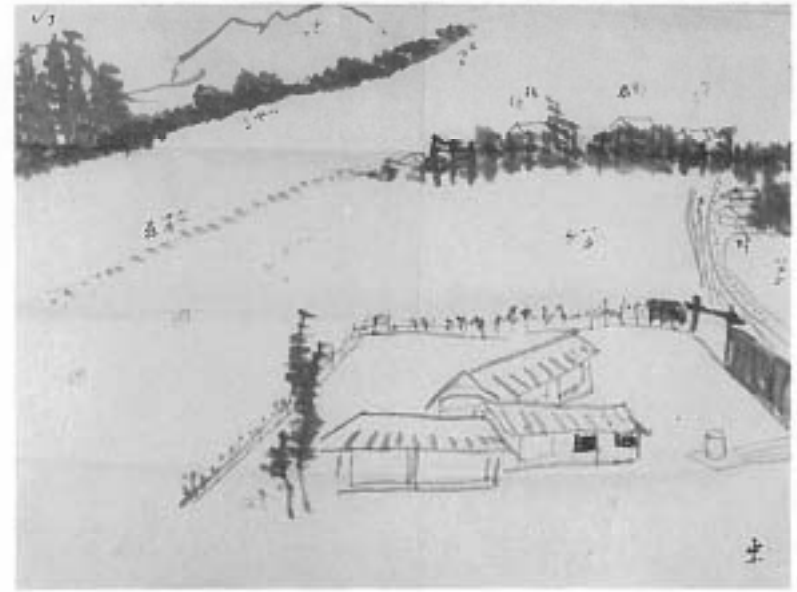
## 6 久喜新町宅

その年の二月、高等学校の記念祭の頃、本郷の彼の下宿へ、伯父<sup>おじ</sup>から葉書が来た。利根川べりの田舎からであった。当分ここにいるから、土曜から日曜へかけてでも、将棋を差しに来ないか。鶏位なら御馳走するから、というのである。

(『斗南先生』より)



資料12 昭和60年頃の久喜新町宅



資料13 トリヤの記載がある久喜新町宅周辺図

## 7 哭 阿 睦

その三蔵の妹は二年前に四歳で死んだ。それを大変悲しんだ伯父はその時こんな詩を作った。

每我出門挽吾衣 翁々此去復何時  
今日睦兒出門去 千年萬年終不歸

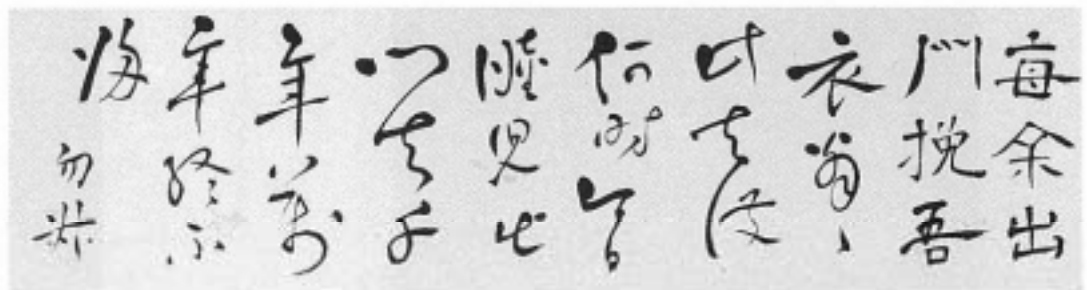
睦子とはその妹の名である。

(『斗南先生』より)

終不歸。詩成未示六時。思惟源更進也。

每我出門挽吾衣翁々此去復何時。今日睦兒出門去千年萬年

我、門ヲ出ル毎二吾ガ衣ヲ挽キ  
翁ヨ翁ヨ此ヲ去リテ何時復ル  
今日、睦兒門ヲ出テ去ル  
千年萬年終不歸ラズ



資料15 端藏直筆の「哭阿睦」の詩

資料14 『斗南存稿』所収の「哭阿睦」の詩

## 8 友人 <sup>あら い まつ し ろう</sup> 新井松四郎

いよいよ其の薬をのむという前に、三蔵は伯父に呼ばれた。側には、ほかに伯父の従弟に当る男と、及び、伯父の五十年来の友人であり弟子でもある老人とがいた。

(『斗南先生』より)



資料 16 中島端蔵（前）と  
新井松四郎（後）

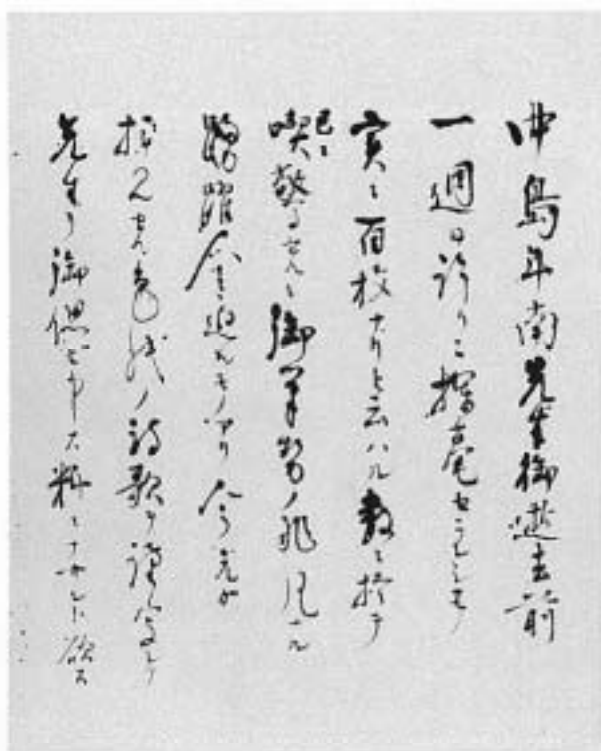


資料 17 かつて端蔵と松四郎等が、身を棄てて国のために働くことを誓ったことがわかる部分。端蔵は、松四郎のことを「兄」と呼んでいる。

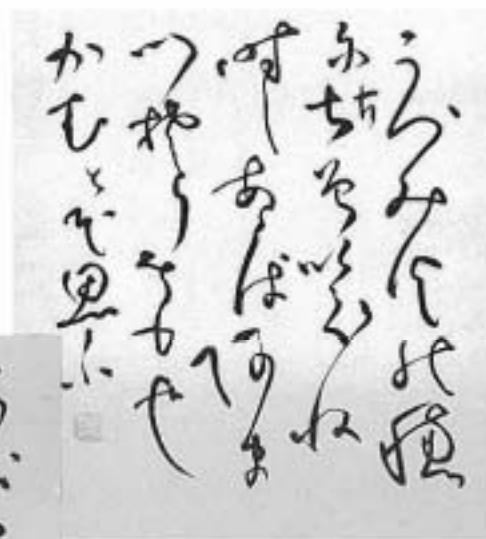
## 9 斗南先生の <sup>ぜっ びつ</sup> 絶筆

<sup>さかまた</sup> 鯨 か何かに成って敵の軍艦を喰ってやるぞ、といった意味の和歌が、確か、遺筆として与えられた筈だったことを彼は思出し、家中捜し廻って、漸くそれを見付け出した。

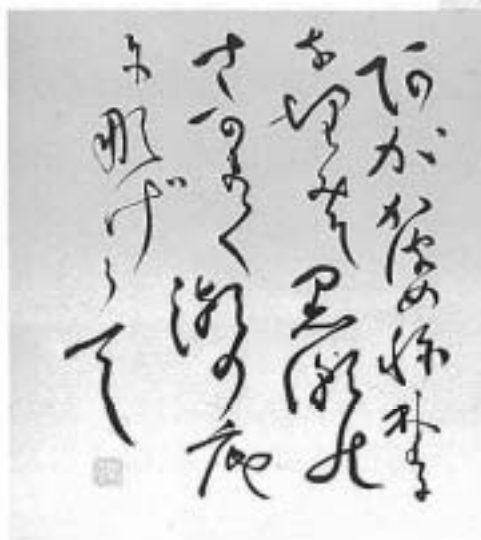
(『斗南先生』より)



資料 18 逝去前に書いた端蔵の揮毫を、田中元輔が記録しようとした理由



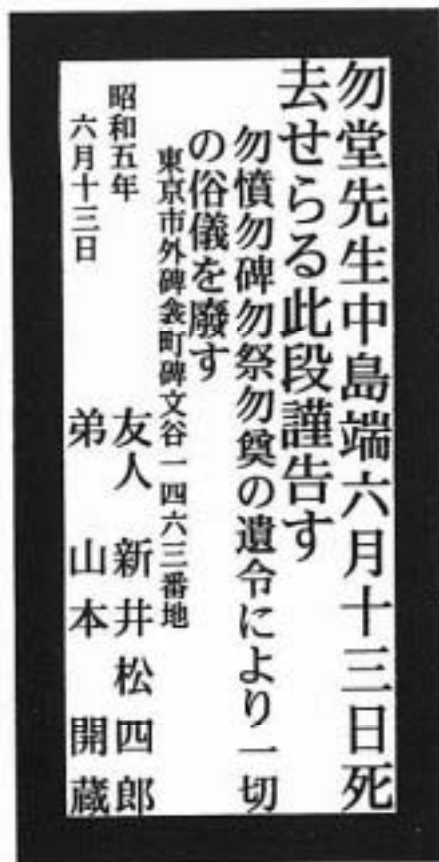
資料 19・20  
端蔵絶筆の  
複製色紙



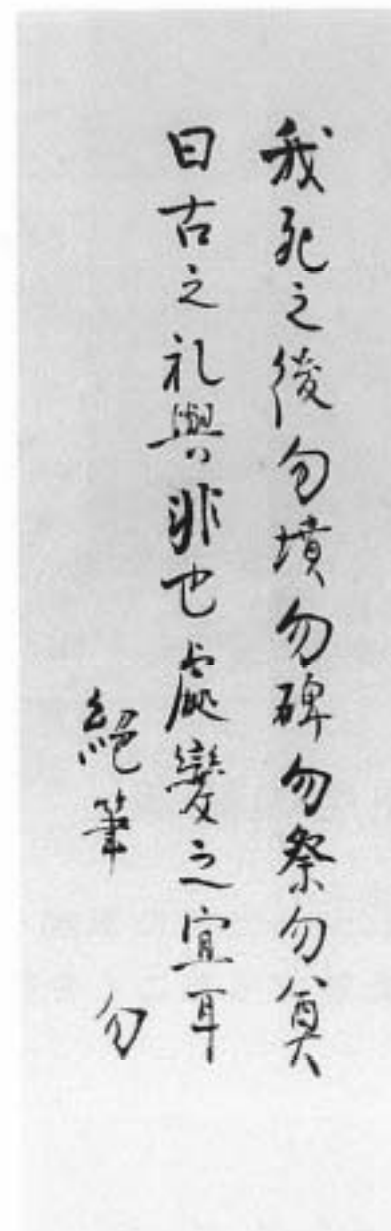
## 10 斗南先生の遺言

死ぬ一月ばかり前に、伯父が遺言のようなものを <sup>あらかじめ</sup> 予め書いた。「勿葬、勿墳、勿碑。」  
 (葬式を出すな。墓に埋めるな。碑を立てるな。) 之を死後、新聞の死亡通知に出した時、「勿墳」が誤植で、「勿憤」になっていた。一生を焦燥と憤懣との中に送った伯父の遺言が、皮肉にも、<sup>いざどお</sup> 憤 <sup>なか</sup> る勿れ、となっていたのである。

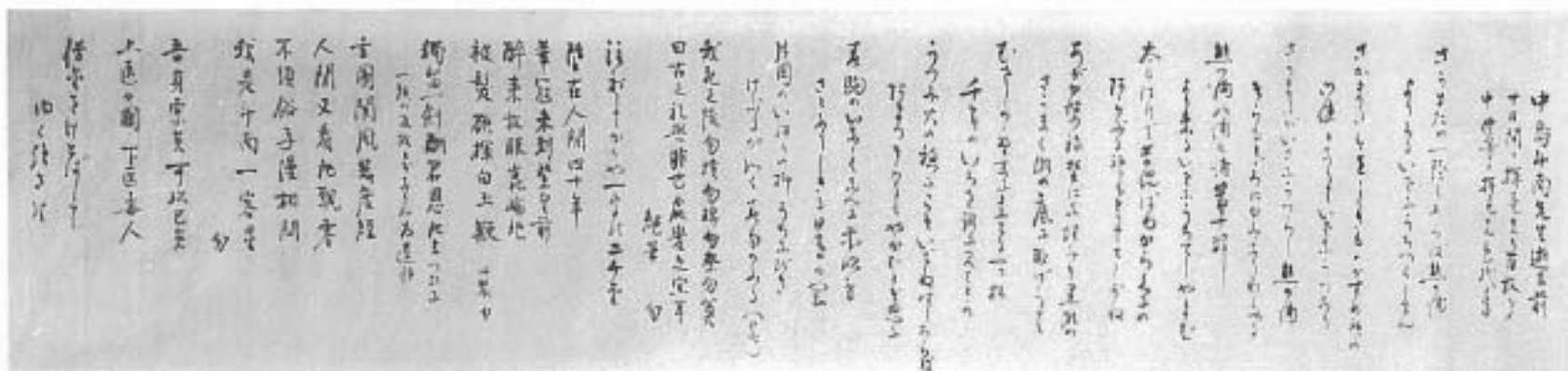
(『斗南先生』より)



資料 21  
15日掲載の  
新聞死亡通知



資料 22  
端蔵の遺言全文



資料 22 田中元輔達によって記録された、逝去前に書いた端蔵の揮毫十数篇



## II 久喜に残る斗南先生の痕跡

### 1 言揚学舎

中島端蔵が設立した私立学校で、明治15年(1882)1月に設置出願し、4月に埼玉県から認可されました(埼玉県行政文書:明1862「明治17年4月町村立・私立学校一覧」参照)。

場所は、「久喜町百二十二番地父慶太郎宅中二仮設ス」とありますので、久喜本町宅に仮に置かれたことがわかります。

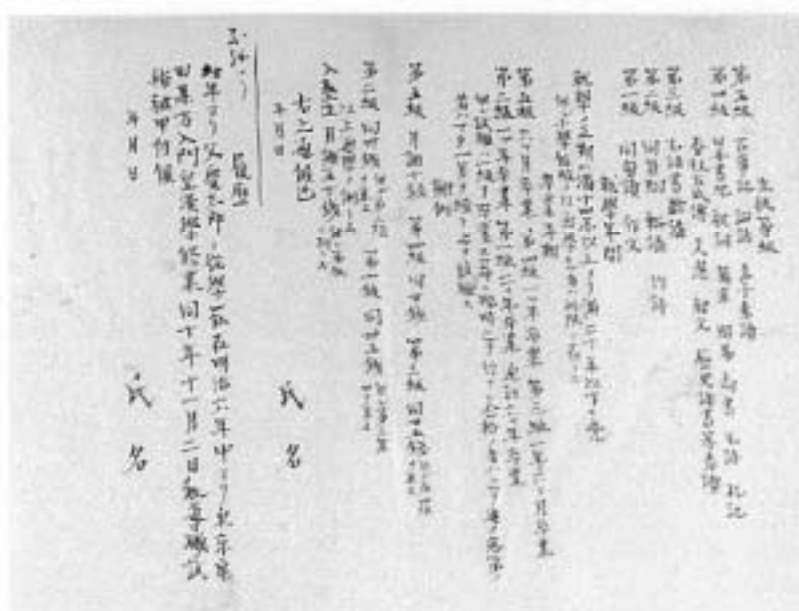
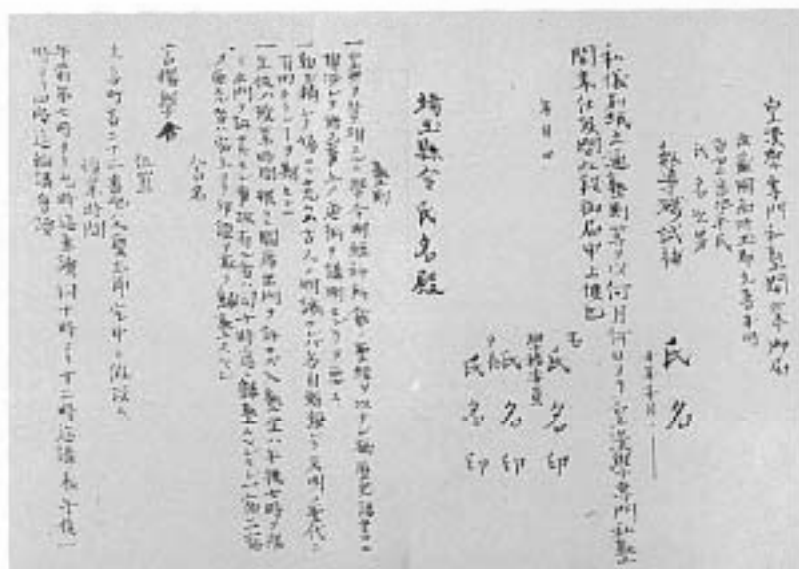
端蔵が設立した言揚学舎は皇漢学専門私塾で、14歳から20歳以下の生徒に日本及び中国の古典を読ませたり、作詩作文を行わせたりしています。

科目としては、「古事記」「日本書紀」「祝詞」「万葉」等の日本の古典と、「論語」「孟子」「周易」「尚書」「毛詩」「礼記」「春秋左氏伝」「文選」「韓文」等の中国の古典があがっています。

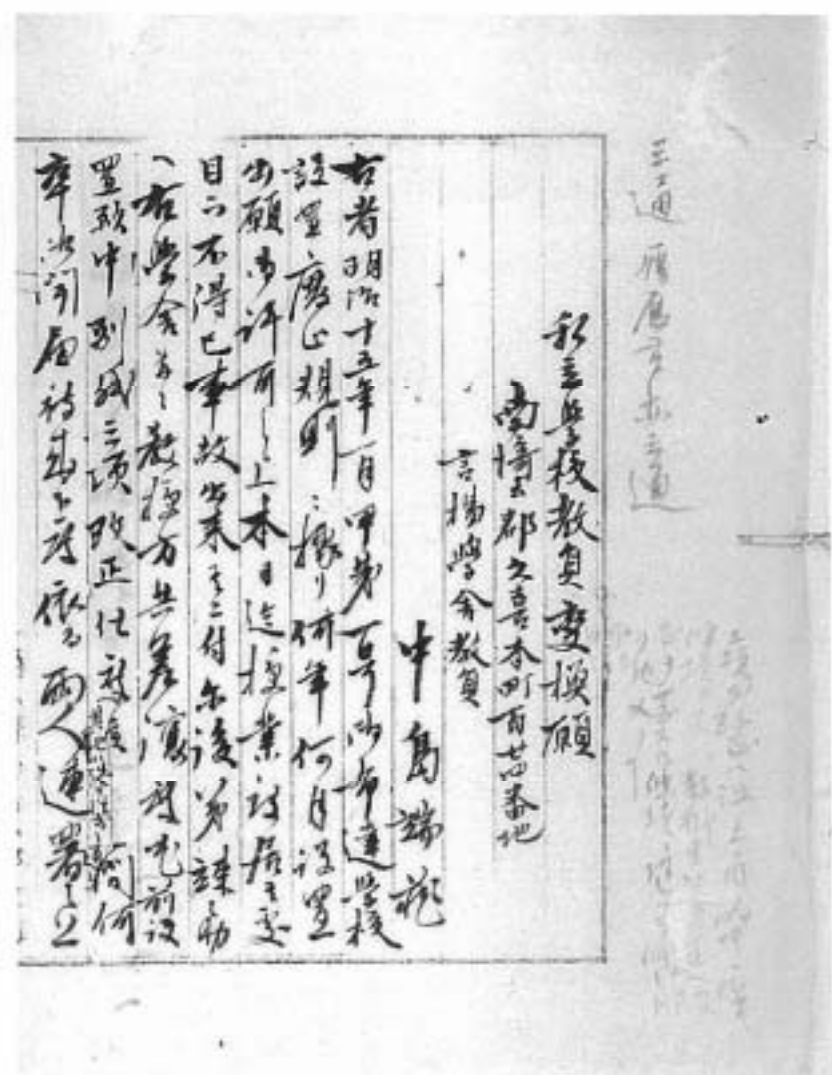
学年は、第1級から第5級まであり、それぞれの所定の年限を修めた後、試験に合格すると卒業できました。

その後、学舎も教授方も共に弟竦之助に譲り渡そうとしています。正式に譲り渡したのは、資料7の履歴書から、明治18年(1885)4月であったことがわかります。

なお、明治20年(1887)10月25日、竦之助は「私立言揚学舎設立願」を提出し、11月12日に埼玉県から認可されました(埼玉県行政文書:明1862参照)。これによって、端蔵が設立した「言揚学舎」は消滅し、名前は引き継がれたものの、竦之助を舎主とする新たな「言揚学舎」が創立されたのです。



資料23 言揚学舎設立のために県に提出する書類の草稿



資料24 言揚学舎とその教授方を竦之助に変更するために県に提出する書類の草稿

## 2 無邪志会

中島端蔵を中心とする政治団体で、明治22年(1889)11月10日に規約が作られていますので、この頃計画したものと思われます。

この会の目的は、「日出処の正気を発し、君子国の美風を存養し、以て一世の弊を挽回するに在り」(第2条)ということで、その目的のために隔月に1回「学術演説会を開く」(第15条)ことが規約に定められています。

会長には中島端蔵、幹事長には内田立輔、その他幹事43名、書記2名の構成員で出発しています。内田立輔は、幸魂教舎(端蔵の父親慶太郎が設立した私塾)出身の元県会議員で、この時は清久村長を勤めていました。

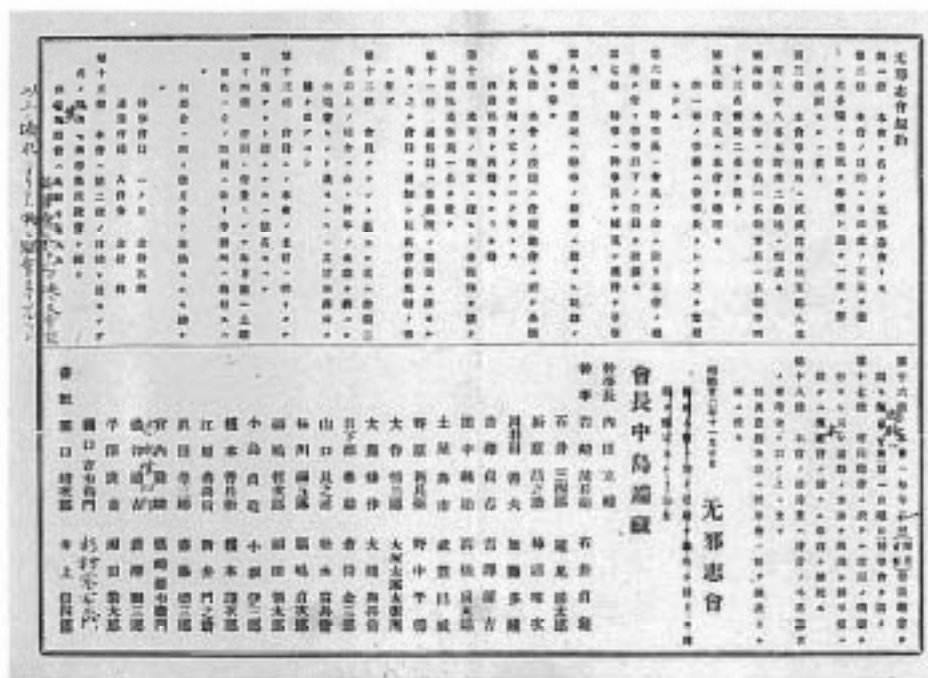
初めての総会では、端蔵が著した『無邪志会立会緒言』が配られ、恐らく端蔵自身によって熱い演説が行われたものと思われます。

この中で端蔵は、無邪志会の「無邪志」とは「武蔵」のことであり、「邪志がない」という意味にも通じると述べ、邪志がない者は職業身分を問わず受け入れることを明らかにしています。

無邪志会の活動については、あまりよくわかっていないのですが、規約と立会緒言を所蔵する市内の土屋家に、端蔵を中心にした1枚の集合写真が残っています。この写真が、あるいは無邪志会の関係者を写したものなのかもしれません。



資料25 中島端蔵を中心にした集合写真



資料26 「無邪志会規約」



資料27 『無邪志会立会緒言』

### 3 明 倫 館

中島端蔵と宮内翁助が共鳴して設立した私立専門学校で、明治26年(1893)10月13日に設置願を提出し、12月4日に埼玉県から認可されています(埼玉県行政文書：明1907参照)。

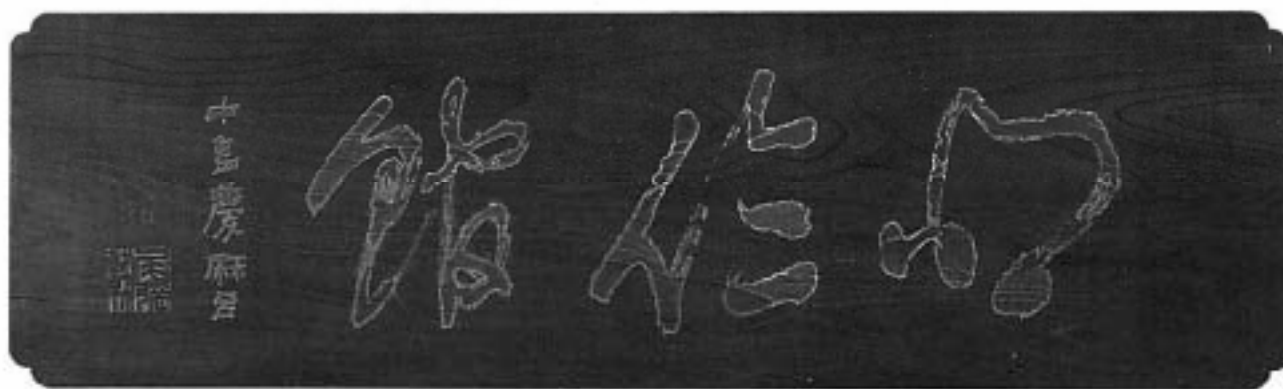
宮内翁助は、幸魂教舎出身の前県会議員で、中学校設置問題等をめぐって県議会が解散されたことに憤慨し、明治26年(1893)に県会議員を辞職した人物です。

明倫館の設立にあたっては、端蔵の父親でもあり、翁助の師にもあたる中島慶太郎に扁額を書いてもらったようです。

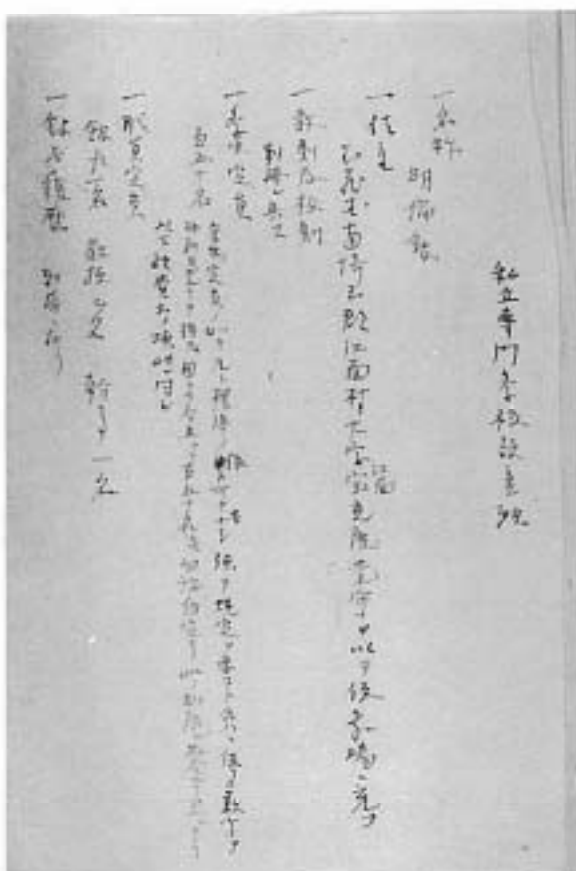
設立当初の教授陣には、館長に中島端蔵、仮教授に田中鏡太郎、嘱託教授に中島竦之助が就任し、わずか3名で始まりました。科目は、皇漢学を主としながらも、「外国語」や「算数」等の副科を置いて欧米の知識も学べるようにしています。

また、授業は江面村(現久喜市)宝光院のお堂を仮教場として出発し、この時本籍を北海道に移していた端蔵は、江面村に寄留届を提出して明倫館の経営に当たっています。この仮教場は、明治35年(1902)に下早見275番地(現久喜市)に校舎が新築されるまで続きました。

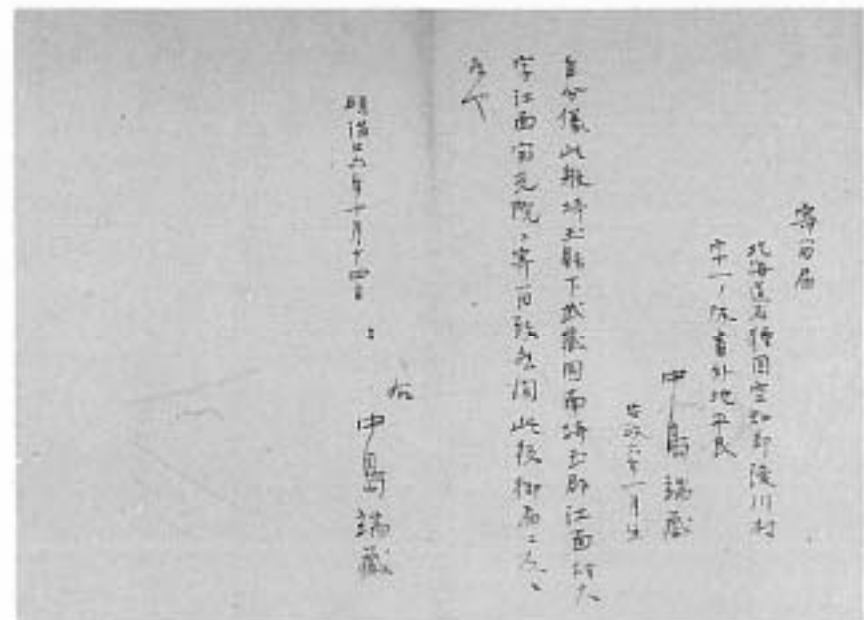
設立当初は学生定員150名としたものの、集まった生徒の数はわずか20名たらずだったようで、明治32年(1899)4月12日、端蔵は明倫館館長の職を辞し、翁助がその後任として認可されました。その後明倫館は、翁助が衆議院議員に就任したあたりから生徒の数が増え、翁助の没後には息子の純が館長となり、昭和10年(1935)4月5日まで存続しました。



資料28 中島慶太郎筆「明倫館」扁額



資料29 明倫館設立のために県に提出する書類の草稿



資料30 北海道に本籍がある端蔵が宝光院に寄留するために江面村に提出する書類の草稿

# 展 示 資 料 一 覧

<p><b>I 資料でみる小説『斗南先生』</b></p> <p><b>1 中島敦著『斗南先生』</b></p> <p>1 『斗南先生』原稿</p> <p>2 写真パネル 中島撫山葬儀後 久喜にて</p> <p><b>2 斗南先生</b></p> <p>3 写真パネル 中島端蔵</p> <p>4 『斗南存稿』</p> <p><b>3 斗南先生の幼年時代</b></p> <p>5 パネル 中島端「日本文章の墮落に候」抜粋</p> <p>6 パネル 勿堂「我も筆も一体」抜粋</p> <p>7 写真パネル 明倫館館長履歴書</p> <p><b>4 斗南先生の言動</b></p> <p>8 写真パネル 明治26年5月31日書簡 (端蔵→新井松四郎)</p> <p>9 明治28年11月23日書簡 (端蔵→新井松四郎)</p> <p><b>5 斗南先生の著作</b></p> <p>10 中島端著『支那分割の運命』</p> <p>11 中島端蔵著『近世外交史』</p> <p><b>6 久喜新町宅</b></p> <p>12 写真パネル 久喜新町宅(昭和60年頃)</p> <p>13 写真パネル 明治42年10月26日書簡 (中島慶太郎→端蔵)</p> <p><b>7 哭阿睦</b></p> <p>14 写真パネル『斗南存稿』所収「哭阿睦」</p> <p>15 中島端蔵書「哭阿睦」</p>	<p><b>8 友人 新井松四郎</b></p> <p>16 写真パネル 中島端蔵と新井松四郎</p> <p>17 明治 年2月27日書簡 (端蔵→新井松四郎)</p> <p><b>9 斗南先生の絶筆</b></p> <p>18 田中元輔「斗南先生揮毫記録」</p> <p>19 「勿堂先生絶筆」(複製色紙)</p> <p>20 「勿堂先生絶筆」(複製色紙)</p> <p><b>10 斗南先生の遺言</b></p> <p>21 パネル 勿堂先生の死亡通知</p> <p>22 田中元輔達「斗南先生揮毫記録」</p> <p><b>II 久喜に残る斗南先生の痕跡</b></p> <p><b>1 言揚学舎</b></p> <p>23 皇漢学専門私塾開業御届 草稿</p> <p>24 私立学校教員変換願 草稿</p> <p><b>2 无邪志会</b></p> <p>25 写真パネル 中島端蔵を囲む集合写真</p> <p>26 「无邪志会規約」</p> <p>27 中島端蔵著『无邪志会立会緒言』</p> <p><b>3 明倫館</b></p> <p>28 中島慶太郎筆「明倫館」扁額</p> <p>29 私立専門学校設置願 草稿</p> <p>30 寄留届 草稿</p>
--	---

## 協力者(敬称略・順不同)

田中靖男、土屋與之、中島 桓、中島元夫、村山吉廣  
 県立神奈川近代文学館、埼玉県立文書館、さいたま文学館、宮代町郷土資料館

## 公文書館利用案内

- 開館時間：9：00～17：00
- 休館日：土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始(企画展の期間中は、日曜日も観覧できます。)
- 交通案内：JR 宇都宮線・東武伊勢崎線 久喜駅西口下車徒歩17分(市役所西側)

発行：平成11年2月 編集：久喜市公文書館 〒346-8501 久喜市下早見85-1 ☎0480-23-5010